

2020年5月31日 説教「心を一つにして集まり」

使徒の働き 2章 40～47節



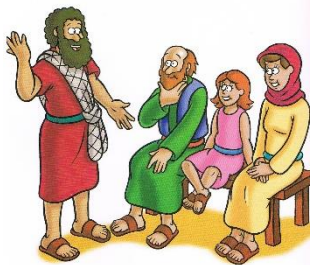
聖霊が降臨した様子は2章1～13節に記されています。その後に使徒ペテロは立って、説教をしたのです。キリストの十字架と聖霊降臨の意味を伝え、悔い改めをうながしました。

1. キリスト教会の誕生 (40～42節)

- ①ペテロのあかし (40)「**ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、『この曲がった時代から救われなさい。』と言って彼らに勧めた。**」ペテロは記されていること以外にも多くの事を語り、キリストと聖霊についての立証をしました。その上で、改めて悔い改めを勧めました。「この曲がった時代」とは、神を無視し身勝手に悪を横行させても何とも思わない時代の事です。それは、今日にもあてはまる事です。その行き着くところは霊的な死です。(ローマ6:23)。そこから人は救われる必要があるのです。
- ②三千人ほどが (41)「**そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。**」ペテロの説教を聞いた後に、そのメッセージを受け入れた者にはバプテスマが授けられました。バプテスマとは洗礼の事です。浸礼と訳したい人もいますから、新改訳は原語音のままにしています。その日、キリストの弟子となった者たちは、なんと三千人に及んだというのですから驚きです。聖霊の圧倒的な注ぎがあったからでしょう。
- ③教えを守り (42)「**そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。**」クリスチャンたちは、使徒から教えられた、クリスチャンの生き方を守りました。ここではすでに、旧約の律法を守るありがたではなく、使徒たちがキリストから教えられたことを教え始めていたと考えられます。信者となった者達はまた、主に交わりをしました。交わり(コイノニヤ)というのは、分かち合うという意味ですが、見える物の恵みも、見えない内なる恵みも分かち合うことを大切にしました。そして、キリストが教えてくださった聖餐式を行い、個人的にも祈り、祈禱会ももっていたのです。

2. キリスト教会の交わり (43～45節)

- ①恐れが生じ (43)「**そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議なしが行われた。**」聖霊の働により、彼らの心のうちには、主に対する恐れが深く生じたのです。神が生きておられるということを実感すれば、人のうちに正当な恐れが生じるのです。その結果、使徒たちを通して、多くの不思議なし(奇跡)が行われたのです。気を付けるべきことがあります。今日、私たちが主を恐れるならば、奇跡が起きるはずで、奇跡が起きないのは信仰がないからだとする事です。なぜなら、奇跡は一方的な主のみわざであり、主の恵みによって起こされることだからです。



② (44)「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。」キリスト信者となった者たちは、生活を共にしながら、いっさいの物を共有にしていました。信者になった者たちの中には貧しい者達も大勢いたことでしょう。しかし、貧富による分け隔てはありませんでした。聖霊降臨によって生まれた教会の最初は、生活共同体のような様相を呈していたのです。それまでの彼らの生活はそれぞれ、異なっていますが、聖霊の圧倒的な迫りにより、生まれたエルサレム教会は生活まで、分かち合うようになったのです。

③分配をして (45)「そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」豊かな者たちのなかには、自らの資産や持ち物を売るなどして、貧しい者に分ける者もありました。一つの家族のようにして、分配し合いながらの歩みが最初の教会であるエルサレム教会の中に、実際的に始まったのです。

3. キリスト教会の成長 (46 節)

①食事をともにし (46)「そして毎日、心をついにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし」エルサレム教会の人々は、毎日集まりました。心をついにして宮でお祈りをしました。家ごとに集まってパンを裂き (新共同訳)、喜びつつ真心をもって一緒に食事をしたのです。毎日のように愛餐会を持っている感じですね。キリストにある交わりの麗しさを、心から喜んでいたのでしょう。そうでなければ、続きません。

②神を賛美し (47)「神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。」そこには主への賛美が絶えませんでした。ともに、主の奉仕をするなかに、賛美の歌が次から次へと口についてきたのでしょう。賛美は喜んでなされる時に、力があり、慰めやいやしを人々に与えます。彼らの歌は、美しく調和していたでしょう。そこで、周りの人々はキリスト教会の交わりに好意を持つようになったのです。

③救われる人々 (47)「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」そのようななかに、主は毎日キリストの十字架と復活の福音を信じて救われる人々を与えてくださいました。そして、その人々も教会の交わりに加わり、仲間となっていったのです。別の見方をすれば、その群れには魅力があって、人々はまるで磁石にひきつけられるようにして、引き寄せられてキリストを学ぶようにさせられたのです。聖霊なる主の大きな力が働いて、人々は導かれたのです。

「しかし聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てまで、わたしの証人となります」(使徒 1:8) とありますが、福音はまず、エルサレムの町中に広がっていったのです。

《結論》本日はペンテコステ (聖霊降臨日) の記事から学びます。ペンテコステとはイスラエルの五旬節のことです。その日に聖霊降臨の出来事があったのです。2章冒頭に経緯が記されています。聖霊が降って、弟子たちは聖霊に満たされ未知の外国語で話し出したのです (絵画①参照)。人々は酒に酔っているのだと揶揄しましたが、ペテロは立って説教します。ヨエル書を引用しつつ、その預言通りに、彼らは聖霊によって語っていることを伝えたのです。また、キリストの福音を語り、人々に悔い改めを促したのです。その結果、三千人もの人々が受洗してキリストの弟子となりました。彼らは喜びに満たされて、クリスチャン生活を始めました。

さて、ペンテコステは、キリスト教会の誕生日でもあります。この時にキリストに導かれた者たちが集められ、エルサレム教会を形成することになったからです。生まれた教会は、本当に救われ、献身した者たちの集まりでしたから、生き生きとしていました。即ち、ペテロの説教を聞いて悔い改め、主の前にバプテスマを受けた多くの者たちが、教会に加えられていきました。彼らは祈りを共にし、主を賛美し、食事を共にし、経済的にも助け合いながら、歩みをしました (裏の絵を参照)。この群れの輝く様子は周囲の者達にも輝いて見えたのでしょう。次々に教会に来て、キリストを紹介されて、その福音を信じ教会に加わっていきました。

今日、世界のコロナウィルスの感染の拡がりに伴い、集まって礼拝をささげることに困難や抵抗を覚えています。世界と同様に、この国においても、集まることを自粛し、オンラインで礼拝をささげる教会も少なくありません。私たちの教会は小粒ですから、オンラインを主流にすることなく、この日までをしのいできましたが、東京などではオンライン礼拝が継続される場所もあるようです。一般世界もこれを機に、文化に大きな変革が生まれてくるのではという論調もあります。作家の五木寛之さんが *alone and together* と言い、オンライン文化が進むだろうと述べました。

今回は、世界の教会が直接に会わないで礼拝をささげていくことを経験させられたということでしょう。それなりの成果があったということも事実です。教会は社会的責任を果たし今後も感染母体とならないよう気をつけなければなりません。一方で、今朝の聖書箇所を読むときに、「みな一緒にいて」とか「宮に集まり」ということが強調されています。また共に祈り、賛美し、御言葉を学び、礼拝をし、聖餐式をし、食事を共にし、物を分かち合うということが、麗しく記されています。教会は集まるということに大切なポイントがあるのだと考えられます。もともと教会の原語であるエクレシヤは、「召し出された者たちの集まり」とい

う意味ですが、この試練の時代にあって、生身の人と相まみえつつ、時を共にして、礼拝を共にすることは重要です。なお、聖霊の力をいただき、模索しつつ地域にあつての礼拝と証しを続けていきましょう。「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか」(ヘブル書 10:25)